
テイルズオブエクシリア～精霊王の意思を継ぐもの～

雷神の鉄槌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア〜精霊王の意思を継ぐもの〜

【Nコード】

N3076BA

【作者名】

雷神の鉄槌

【あらすじ】

普通に大学に通う大学3年生主人公。

彼はテイルズオブエクシリアのゲームを買い、楽しみにしながら家に帰ろうとした直後、トラックが車にひかれ、死んでしまった。

彼が次に目を覚ますとそこは真っ白い空間であった。

困惑する彼の前に神：ゼウスと名乗るお爺さんが現れる。

ゼウスが語る。彼の死んだ理由を。そして、言った。転生しないか？と。

その転生先の世界はテイルズオブエクシリア…の並行世界。

彼は喜んだ。そして言った。行く!と。

そして、彼はエクシリアの世界へと行くのであった。

彼の新しい人生…彼は若返り、髪・瞳の色も変わり、新たな物語が始まるのであった。

プロローグ エクシリアの世界へ（前書き）

エクシリアのゲームを買い、書いてみたいと思い書き始めました。

ブローグ エクシリアの世界へ

〔Side ？〕

「ありがとうございました」

待ちに待った時が来たのだ！この短く長い4カ月という時間を無駄に過ごしたことは……

再びこのゲームー魂に火をつける為に！完全コンプリートするために！

ティルズオブエクシリアよ！俺はお前を待っていたああ！！

っと、いけねえ。興奮していないで早速家に帰ってプレイしなければ！

そう思い、俺は信号を渡ろうとした…その時！

キイイイイイ ……！！

「えっ？」

ドオオオオン！グチャ！！

こんな…結末…あり、か…よ

薄れよく俺の目の前で買ったばかりのエクシリアのゲームが宙を舞っていた。

そして…俺の意識はシャットアウトした。

ん……んん？あれれ？おかしいな。俺、確かトラックか何かに乗かれて死んだはずだよな？なのに何でこんな真っ白な空間にいるんだ俺は？

うゝむ、よくある二次小説にある「テンプレ」的な展開だな。

「その通りじゃ。お主の思っておる通りお主は死に、ここにおる」

！？俺の目の前には髪と長い髭の爺さんがいる…だと？これが俗にいう神様…ゼウスなのか？

「そうじゃ。俺の名はゼウス。お主は本来であれば死ぬことなく死ぬまで間に数々の名作とも入れるゲームを開発しておった…はずじゃった」

あ、あの〜もしかして、もしかしなくても俺は何かのミスで本来死ぬはずじゃなかったのに死んだことに神様が思うところがあって俺の前に出てきたってことか？

「そうじゃ。俺の部下が書類にミスをしての（まあ、そのミスのこととは言えんがな）…そこでお主には上司である俺自らがお主に謝罪しよう。すまなかった」

神様は俺に土下座している。ええ！？ちょ、神様！そんな土下座なんてしないでくれ（汗）

「いいや。俺の部下への教育ミスじゃ。じゃからお主には…お詫び

として転生させよう」

えっ、マジで！？……でも、どこに？

「お主が死ぬ直前に買って楽しみにしておったテイルズオブエクシリアの並行世界へ転生させよう。ちなみに、お主を何故並行世界のエクシリアへ転生させるのかというと……お主と言っイレギュラーを入れたら何が起こるかがわからんからの。故に並行世界へ転生させるのじゃ！」

おお、俺、ある意味死んでよかったかも！ミラとかに会えるのか！
楽しみだな。

あ、でも、俺転生しても戦う力ないし、転生しても死ぬんじゃ……。

「そこは安心するがよい。お主には謝罪を込めてお主の知っているテイルズシリーズの技・魔術を伝えるようにしよう。後はそうだのおく物とかを作れる能力でも上げよう」

マジで！ならさ、俺にアビスのジェイドみたいに武器とかを……まあ、持つとしたら剣だけど、それ以外の武器をどうやって持てばいいかわかんないし、だったらジェイドみたいに武器を身体の一部として収めていられるようにできるか？

「出来るぞい。そのような技術を使うのであればいいじゃ、エタールソードとか作れるようにしよう……完全にバグキャラチートじゃがの」

おお！神様、あんたマジでCoolだぜ！

「フオツフオツフォ。これが儂にできるせめてもの償いじゃよ。で

は、新しい人生…頑張るのじゃよ」

神様が俺にそう、言つと俺の足元に穴ができた。

おい、神様。これはどう見ても……

「うむ。お約束と言つものじゃ。ついでにじやが、お主、転生後は年齢は10歳前後、髪の色と瞳の色は変わっておるからの」

歳以外はテンプレじゃねえかあああ！

「これもお約束じゃよ」

神様が　なんてつけるんじゃねええ！！つて、あああれえ~~~~~

そのまま俺は穴の中に落ちていったのと同時に目の前が真っ暗になった。

次に目を覚ますとそこには…

「お前は誰だ？」

【見たことのない子どもですわ】

【迷子ではないのか？】

【だったらさっさと返そうよ。面倒なことになるし】

【親御さんが心配するでし】

一人の少女と4体の人ではないもの達が俺の目の前にいた。

これが俺が愛する女性となる少女……ミラ＝マクスウェルとの出会いであった。

プロローグ エクシリアの世界へ（後書き）

次回は少女と会って一気に時間は原作時間へ。

第一話 出会い（前書き）

ゲームをしたことのない人へもなるべくわかるように書いてみました。

原作の台詞に主人公が加わっているので、若干、台詞が違くなっているかもしれませんが。

後書きにお知らせがあるので是非見てください。

第一話 出会い

Side 第三者

窓から差し込んでくる朝の陽ざし、そして松明をわずかな光源とするほの暗い一室：そんな静謐な空気の立ちこんでいるその部屋の奥にある壇の上とその近くにある壁に寄り掛かる一組の男女がいた。

女性も男性もまだ若く、女性は壇の上で胡坐をかきながら、顔を俯かせている。

その女性はガーネットを思わせるであろう真紅の瞳に、腰まで達する豊かに波打った長い金髪。

男性はエメラルドを思わせる緑の瞳に、女性と同じぐらいに伸びた金髪。

女性の名はミラ、マクスウェル。男性の名はセリカ・バルセルト

2人はその場からまったく動かず、少しして女性がはっと表情を浮かべて言う。

「精霊が…死んだ」

「お前の表情を見ればわかるさ」

ミラは壇の上から立ち上がるとどこからか入ってきた蛇がミラに噛みつくようにする。蛇の鋭い牙はミラの白磁を思わせるほど美しく統べらかな肌に付きたてようとしますが、

ポオオオ！

その瞬間、蛇の全身が青白い炎に包まれ、初めからなにも居なかったかのようにその存在を消滅させた。

ミラの後ろにはいつも間にか赤い何かが浮かび上がっており、ミラを守るかのようにその存在を露わにしている。

ミラは蛇がいたことにも燃え尽きたことにも動じず、じつとセリカを見て言う。

「やはり、黒匣ジンの力かもしれない。確かめる必要があるな」

「ああ。精霊が死ぬってことは黒匣ジンを使ったかもしれないしな」

ミラはセリカ以外にも話しているかのように告げ、壇を降り、部屋の出口に向かって歩き始める。

セリカもそんなミラを見て同じように出口へ歩き始める。

出口へ歩き出す2人の周りの空気が揺らめき、赤に加えて青・黄・緑の何かがうつすらと姿を現した。

「そうか。六年ぶりになるのか。久しぶりだ」

「奴らも六年前に諦めているものかと思ったが…案外しつこいんだな」

2人は互いに顔を見合い、笑みをこぼす。

2人が歩くたびに何かが軋む音がする。

出口の前まで来た2人は、いったん足を止め、扉を見つめている。

「行こう。イル・ファンへ」

決然とした口調で告げると、2人同時に扉に手を置き押し開け、光あふれる部屋から外へと出ていき、ミラの周りには緑の何かが纏い始め、セリカは何かを集め始めると背中に緑色の羽が生え、2人同時に空へと駆けていった。

Side 第三者 Out

Side セリカ

俺とミラはニ・アケリアにあるミラの社を飛びだし、この世界……リ
ーゼ・マクシア随一の繁栄を誇る大都市イル・ファンへ向かってい

る。イル・ファンは精霊術文化が高度に花開いたことで繁栄し、二かになつた都市だ。

この都市は他の都市よりも微精霊は豊富であり、市街地全域に整備されている街灯樹も微精霊の力を利用している。

これのおかげでイル・ファンは終夜にわたって昼の明るさに匹敵する灯りを都市に住む市民達に提供している。

俺達はそんなイル・ファンの一角で、灯りが灯らない場所へと降り立つ。

「……このあたりか」

「みたいだな」

墮ち立った場所は川の上だったが、俺とミラは没することはなく、水面に光る円がいくつも水面の上に現れ、道を示すかのように次々と現れていった。

俺とミラはその光る円が現れる方へと歩みだす。

「感知したのは、この先？」

「ウンディーネがこうやって俺たちに道を示しているんだし、間違いないだろうな。それとミラ、いくら自分がマクスウェルだからって油断するなよ？」

俺がミラに注意を言うと、ミラはその女性の象徴である大きな胸を揺らしながら腰に手を当てる。

「わかつている。セリカは心配性だな」

「……なら、いいんだけどな」

話しながら進むとそこには大きな建物があった。

水が流れているところには見るからに頑丈そうな鉄格子ははまってあって、人の侵入を拒んでいるが、俺とミラがこんなもので侵入を拒められるはずもないな。

ミラが目を閉じて集中し始めると、目を開けると共に左手の指先から炎が迸り、あっという間に鉄格子を雨のように捻じ曲げていき、俺たちが通れるぐらいになった。

俺達がいざ、中に入っていくため、歩き出そうとすると、

「うわつとー!」

後ろから声が聞こえ、振り向いてみるとそこには……俺が知っている数少ない知識の中にあるテイルズオブエクシリアのもう一人の主人公……ジュード・マティスが水面に立っていた。

Side セリカ Out

Side ジュード

それは突然の出来事だった。僕は今日、研修の診察を終え、七の鐘になっても帰ってこないハウス教授がいるであろう研究所へ迎えに来ただけだ。入口まで警備兵に追い返されちゃったんだよね。

でも、何もなしで帰れないから警備兵に出所記録を見た時には驚いたよ。

ハウス教授はとくに帰っていると書かれていたんだ。僕は腑に落ちない気持ちになりながらも来た道を戻っていると、それは起こった。

研究所周辺の街灯樹の灯りが次々と消えていったんだ。それに加えていきなりの突風で持っていた書類を飛ばされて、その書類が飛ばされて川を流れていくのを見ていたらあり得ない光景を見たんだ。

水面の上を一組の男女が歩いていったんだ。男女は僕よりも年上。大体20歳前後僕は急いで、その後を追うため、川面のところまで降りていくと、光る円のようなものところにさっき飛ばされた書類が引っ搔かっていたのを拾って男女を追おうと光る円の上に乗ったんだけど……

進むにつれてその光る円が消えていくのに焦って声を出しちゃったんだ。

「うわっとー!」

僕のその声に2人は気づき、僕を見た。

「あ、あの…」

僕は何か話さなくちゃと思い、声を掛けると、

女性は指を唇にあてていう。

「危害は加えない。静かにしていれば、な」

そついい、男の人と歩き始めた彼女に思わず言った。

「その先は研究所だよね……？君達は一体……？」

何をする気なの、と問おうとしたら女性が左腕を横に伸ばしたら僕の全身に巨大な泡に包まれて、息ができなくなっちゃったんだ。

「ぐっ……？ごほっ……！」

僕は息ができないので苦しく、両手で喉を押えていると女性が言葉を発した。

（Side ジュード Out）

Side セリカ

あらら、ジュードがウンディーネの泡に包まれちゃったよ。

「ぐっ？」「ほー！」

しかも息ができずに苦しんでいるな。

「静かにしてほしいと頼んだつもりだったのだけど……」

「ミラ、彼が何か言っているぞ」

「？」

ミラは俺の言葉を聞き、ジュードを見る。

「ん？ 静かにするか？」

ジュードは首を振り、わかったつと言っている。まあ、泡の中だし、言葉を発すること出来ないから首を振るしかないよな。

ミラはジュードの真意がわかると、泡を解除する。

「つつぶ……」「ほ、ほ……」

ジュードは光る円の上で、むせている。

「咳は……ま、大目にみよう。君は、そこで何をしていた？」

「少年、正直に話した方がいいぞ？こいつは怪しいやつには容赦しないぞ？」

俺がそういつと、ジュードは怯えたが、言った。

「……………しゃべっても？」

…どうやらミラが喋った瞬間、同じことをするのではないかと思っ
ているんだな。

それがわかったミラはこくりと頷く。

「僕は、その、ただ落し物を拾おうとして……………」

ジュードの手の中には書類があった。それを見てミラも納得したの
か、そのまま鉄格子へと歩き出す。俺もそれに続いて歩き出す。

「何するつもり？すぐに警備員が来るよ」

ミラはそんなことを聞きながら言う。

「なので急いでいる。君は早く帰るといい。不審者として捕まっ
てしまう前にな」

「少年、君はこの街の住民だな？俺達の話は気にせず、このまま
家に帰って寝ていなさい」

俺とミラはジュードにそういつって地下水路へと入っていった。

第一話 出会い（後書き）

今回は主人公：セリカの設定を書きます。

それと募集したいのですが、後数話後には共鳴術技リンクアーツが登場する予定なのですが、原作にはない共鳴術技リンクアーツを出したいと思っていますので、これを読んでくださった読者の皆さんに共鳴術技リンクアーツを募集したいと思います！

私が読んでいるエクシリアの小説を書いているレイフォンさんみたいに多くの共鳴術技リンクアーツが募集されるのを楽しみにしています。レイフォンさんと同じになってしまってもレイフォンさんには許可をいただいていますので、こちらの感想に書いてください。

募集方法は以下の通りです。

- ・ 誰の技 + 誰の技・又は術リンクアーツ
- || 共鳴術技リンクアーツ
- ・ 共鳴術技時に言うセリフリンクアーツ

と言った感じです。よろしくお願いします！

セリカ設定

名前：セリカ・バルセルト

年齢：20

身長：178cm

体重：65kg

髪・瞳の色：金・緑色

容姿：街の女性、100人中100人が見惚れるほど。そのせいかミラに腕を抓られたりする。

参考：転生トリップ後、ミラと出会ってから少しして1年間、武者修行の旅に出て鍛え、今では大精霊にも勝てるほどの力を有している。何故旅に出たのかというと、いくら力をもらってもその力を使いこなせる肉体と精神がないといけないなとセリカは思い、1年間の武者修行で自身にある力をコントロールすることができるようになった。

今はその力をミラのために使い、二・アケリアの民たちには『ミラ様の騎士』とも言われている。

なお、前世で女性にモテなかったせいなのか自分の容姿に見とれている女性がいると嬉しくなり、笑顔になるのだが、そのたびにミラに腕や身体はどこかを抓られるので、何故とすることがある。

ステータス：レベル・不明

武器・スタイルヴァーレ（神属性・攻撃力は所持者の

能力で決まる)

・物干し竿(無属性・佐々木小次郎:アサシンの持っていたあれ)

・レーヴァテイン(火属性・技を放つ時に火の属性が付加される)

スキル・スペルマスター(今現在、地水火風は無詠唱で精霊術を使うことができる)

・高速詠唱(詠唱が必要な精霊術の詠唱速度が通常よりも遥かに早い)

・四大使役(四大達と契約をしたから使える)

・オーバーリミッツ(リンクしなくても一人でオーバーリミッツすることができ、秘奥義も使える)

・後は原作にあるスキル

称号:・転生者(エクシリアの世界に転生してもらった称号)

・ミラの騎士(ニ・アケリアの民たちにはミラ様の騎士ともいわれる)

・四大と契約せし者(世界でミラ以外にいる四大と契約した唯一の人)

セリ力設定（後書き）

次回から話しに入ります。

第二話 研究所

Side セリカ

ジュードを置いていき、俺とミラは真っ暗な地下水道の中を歩いている。

「ああ、周辺の微精霊たちも気配がばったりだ」

「だな。それと同時に感じた異常な力が精霊達を吸収しているであろう源がここにあるんだろうな。こんなに大量の精霊達を吸収することとは今までにないほどの規模の黒匣^{ジン}ってことだよな」

俺の言ったことにミラもそうだなっと言い、険しい表情をして言う。

「なぜ人は世界を破滅に向かわせるような力を求めるのか。黒匣^{ジン}が無くとも生きていけるといふのに……」

「人つてのは一度自分よりも強大な力を持つものに惹かれるもんだぜ。他者よりも自分が有利になることを望むしな」

俺はミラと共に黒匣^{ジン}を使っていた者達を見てきたが、誰もがそれに魅入られている奴らが大半だった。黒匣^{ジン}がどういった物なのかを知らずに使うものもいれば、知っていて使うものがいた。

「だが、セリカ…お前は違っただろう？私達と初めて会った時から一年間修行の旅に出て皆を納得させる実力を身に付け、四大達と契約しただろ」

「まあ、な。……にしても、こんなものを作るやつらって言ったら
やっぱじり……」

「ああ。やつらの仕業だな」

俺とミラの間空間が揺らぎ、俺たちに言ってきた。

「私の勘だ。十分だろう？ 誰でもない、マクスウェルとセリカの勘
だ」

いやいや、勘だけでそんなことがわかるのはお前ぐらいだぞミラ。
俺はこんなことをするのはやつらしかいないと思っているだけだぞ。
つと話しが逸れるな。

「ミラ。四大達と会話していないで行くぞ」

「ああ。早く黒匣クワックスを見つけ出し、破壊しなくてはな」

止めていた足を再び動き出し、俺とミラは地下水路を進んでいった。

進んでいくと兵士とばったり鉢合わせした。

「貴様ら、何をしている？」

「何故ここにいるんだ！ 答えようによっては……」

そう言いながら兵士2人が持っている槍を構える。

「はあく急いでいるんだがな……寝てる」

シャン！カチャ！ドサツ！

俺は剣を鞘から抜くのと同時に、兵士2人を鎧越しにみねうちで気絶させた。

「相変わらず、見事な剣捌きだなセリカ」

「そう思うなら四大達の力に頼ってばかりじゃなくて自分の力で戦えるように鍛錬しろっよ」

「むっ、別にいいさ。皆が力を貸してくれているからな」

少し拗ねたのか、ミラは歩き出した。

「…仕方ないな」

頭を掻きながら俺はミラの後を追った。

ミラを追うと、ミラが梯子の前で立っており、登ろうとしているのを俺は止める。

「待て待て！先に俺が登る」

「…なぜだ？」

……そうだった。普通の女性なら「わかったわ。先に行っつてね」と

か「絶対に上を見るんじゃないわよ!」とか言っが、ミラには常識
と言っかそういつた知識がないんだつた。

「ミラ。俺は男。お前は女。お前、服装スカート」

「?????」

…もついいや。

「俺が先に登るからな」

俺は梯子に手をやり、上に上がつていつた。

俺に続いてミラも梯子を登り始めた。

梯子の先にあつた蓋を退かし、研究所の中に入ることができた。

ミラも梯子から登つてくると周りを見て言っ。

「随分と、大がかりな施設だが、一部屋ずつ探せば必ず見つかる」

「ああ、片っぱしに調べていけば見つかるだろつ」

一部屋ずつ確認することに。

一部屋一部屋探していくと、ロックされていた部屋以外には2階の

部屋だけになった。俺とミラは階段を登り、2階へと来ると部屋の中から大きな物音がした。

俺とミラは顔を見あい、部屋の中に入っていった。

Side セリカ Out

Side ジュード

僕はあの2人を追って地下水路に入り、梯子を登ってみると中に入ってハウス教授を探した。ロックされていた部屋以外に探していない場所は2階の部屋だけだったからその部屋に入るとそこにはハウス教授がカプセルの中で苦しんでいた。

そして、何かを言いながらハウス教授は……死んだ。ショックを受けていると部屋の上にはいた僕と同じぐらいの少女が僕に攻撃してきた。

応戦したけど……全然、歯が立たなくて、僕は生き残るために何かないかと考えていると……

「あの人達は……」

部屋の入り口にここに来る前に見た男女の2人がいた。

「アハハ。そつか、侵入者ってあんたたちの方か」

僕と戦っていた少女は武器を2人に構え、

「つまないんだ、この子。だから、あんた達から殺したげる」

精霊術を唱え始めた。

「逃げて！」

僕は2人に言うが、

シユドオオオン！

女性の方が少女よりも遥かに早い精霊術で、少女の顔にぶつけ、少女はそのまま吹き飛ばす。

す、すごい！詠唱していなかったように見えたけど…早いし、かなりの威力の精霊術だ！

2人は部屋の中を見ている。きっと、この部屋で何をしていたのかなって考えているのかな？

そうしている間に少女が立ちあがった。

「その顔、ぐちゃぐちゃにしてやる！」

「それは困る」

「そんなことさせねえぞ」

怒りを露わにしている少女に、女性と男性が武器を構えて言う。

「死んじゃえよ！」

少女が火の精霊術を飛ばしたけど…

「又ルイな」

斬！

男性の方が精霊術を剣で斬った……えっ、斬った！？そんなことできるの！？

僕が驚いていると女性の後ろに赤いなにかが出現し、拳で少女を吹き飛ばした。

こ、この赤いのってまさか！

【ウオオオオオ！！！！】

「こ、これってイフリート？」

「そう、火を司る大精霊だ」

「よ、四大精霊を召喚するなって」

あれ？でも、四大精霊って20年前に召喚できなくなったはずじゃ

…？

Side ジュード Out

Side セリカ

あーしんどいな。ジュードはイフリートを見て驚いているし。女…
確かアグリアだったけ？はイフリートに吹き飛ばされて伸びていやが
るし。

「す、すい……」

ジュードはジュードで、ミラと俺を見ているしな。俺達は剣を鞘に
納める。

「帰れといったろう。まさか、ここが君の家というわけか？」

ミラは研究室を見ながら言う。

「うっん。違う……。……しめんなさい」

ジュードが謝る中、ミラは歩き出す。

「あ、あの……」

「これが黒匣^{ジン}の影響……？」

ガラスケースの中の人達を見てそう、呟くミラ。

「おそろくな」

俺もミラがいているカプセルに近づき、そう言う。

「黒匣^{ジン}……？」

ジュードは聞こえた言葉を不思議に思いながら繰り返す。

「微精霊たちが消えたのに関係している？」

そう、四大と話すミラの言葉をてっきり自分に聞いているものだと
思ったジュードが言う。

「え、わからない……精霊が消えて……？」

それを見いたミラが後ろを振り向き、まだいるジュードに向かって
言う。

「君は早く去るといい。次は助かるという保証はないのだから」

ミラがそういうと、ジュードは空になっているカプセルの中を見る。
…いや、この中にいた人物のことを考えているんだな。

ジュードにそういったミラはミラで伸びているアグリアの傍に落ち

ているカードキーを手に持つ。

「黒匣^{ジン}……どこか別の場所か」

「これだけ探してもないってことはそういうことだろうな。そのカードキーはさつき入れなかった部屋で使えるだろうな。おそらくそこにあるだろう」

俺がそういうとミラも先ほど開かなかった部屋のことを思い出し、カードキーを胸元に仕舞った。毎回思うがあれか？胸が大きいからそこに物が入るのか！？

と、まあ、変な疑問を持つ俺だな。

俺とミラが部屋から出ようとするど、

「ね、ねえ、待って」

ジュードが俺達を呼び止めた。

「……あてがないんだ。教授と一緒になら、ここから出られたかもしれないけど。僕も行っていい？」

そう、ジュードが言うのを聞いて俺とミラはお互いに顔を見合う。

「ふふっ、なるほど、確かに。それなら次も助かるだろう。君は面白いな」

「ああ、ってか。そういう時はもっとはっきりにいなよ」

それを聞いて、ジュードは俺達に手をさしのばした。

「ジュード・マティス。それが僕の名前。君達は？」

「私はミラ。ミラ＝マクスウエルだ」

「俺はセリカ。セリカ・バルセルトだ」

俺達は交互に握手をした。ミラの手を握ったジュードの赤くする表情にムツとしたのは秘密だぞ？

第三話 槍と失う力

〔Side セリカ〕

俺達が部屋を出ると、俺達の持つリアルオーブが光り出した。

「む、この光は……？」

「リアルオーブが光ってる」

2人はリアルオーブを仕舞うと、ミラはジュードに聞いた。

「これは確か…前にセリカに無理矢理持たされたものだが、これはなんなのだ？」

「って、おい！随分前に話しただろうが！」

ってダメか。その頃、ミラは黒匣ツインの破壊を優先してたし、俺が話したことなんて忘れてるか…。

「ジュード。説明よろ」

俺はジュードに説明を投げだす。

「ええっ！？…え、えっとな……」

ジュードはミラにリアルオーブについて細かく説明し始めて、

「………と言っわけ。僕も成長させたのは初めてだけ。」

ジュードが説明し終わるとミラは納得したのか、

「なるほど、潜在能力を覚醒させる道具か。非力な人間には必要不可欠な品だな」

「本当に人間じゃないみたいな言い方……」

「（人間じゃないしな……）」

話しを終わらせ、俺達は再び研究所を進んでいく。

「ミラ・マクスウェル……精霊の主と同じ名前なんて変わっているね」

「同じも何も、本人だからな」

「そう、その本人何だよ」

ピキッ

「え?」

ミラの正体を隠さず言うとジュードは驚き、目をカッと開きミラを見る。

「精霊の主、マクスウェルとは私のことだ」

「ええっ!? けど、どう見ても人間……」

ミラに顔を近づけるジュードは途中で顔を赤くした。

「……の、女の人にしか見えないよ」

「当然だ。そのように体をつくったのだから」

「体を……つくった!？」

そりゃあ、驚くよな。身体を作ったなんて言われれば。

「マクスウエルって、元素を支配する、精霊の主だよ……」

「信じられないか？」

「いきなり精霊だって名乗られても、さすがにね」

そう言うジュードの後に俺はミラに小声で言う。

「（俺も最初は信じられなかったんだぜ？あの頃は美少女だったからなミラは。今は美人で綺麗だし）」

「（そ、そうなのか／＼／＼／＼？す、少し照れるな……むっ？私は何故、セリカに綺麗だと美人だと言われるとこんなにもドキドキするのだろうか……？）ん。では君たち人は、自分の存在の証明をどのようにしている？」

ジュードはそんなミラの質問に答える。

「えっと……例えば身分証とか。僕も医学校の学生証持ってるし」

「ふむ。あいにくだが、私の場合、その方法では証明できそうにないな」

そもそも、精霊に身分証何てないだろ。二・アケリアではそんなのなくても村長達が証明しちゃうしな。

「精霊の身分証を発行するものに心当たりがない。セリカ、知っているか？」

「人間である俺がそんな精霊専用の身分証を発行するところなんか知るわけないだろうが」

「だ、そうだ」

俺とミラを見ながらジュードは呟いた。

「僕……ついて行って大丈夫かな……」

ジュードは俺達の後ろで今、俺たちに着いていっていいのかと疑問に思い始めていた。

もうすぐロックされていた部屋に着く頃、

「ハウス教授……期待してるって言ってくれたのに……あんなことになるなんて……」

部屋に近づいているとジュードが俯きポツリと呟いた。

「……………」

すると、ミラが突然ジュードの頭を撫で始め、

「え？」

「なにやってんだ、ミラ？」

ジュードは驚き、俺はミラの行動に呆れている。

「人は元気がない時に撫でられると喜ぶことがあると本で読んだんだ」

「……………なんて本？」

「『魔法の手、瞳は鏡』」

「……………それ、育児本じゃないか。僕は赤ちゃんじゃないよ」

ミラが言った本の題名を聞いてジュードは肩を落としながらミラに文句を言う。

だが、ミラは余計に元気をなくすジュードを見て、

「む。君には適さない方法だったか？難しいな……」

と眉を寄せて考え込んでしまう。しかも、

「だが、セリカにしてやった時は嬉しそうにしていたぞ？」

「ブツ

」!

「こ、こいつは何を言いやがりますか?!」

「ええっ?!」

ジュードが俺を見て驚く。

「アホか!!あれはいきなり頭を撫でられて恥ずかしくなっていただけだ!」

「そうなのか?」

「そっだよ!」

まったく!ミラには今度、ちゃんとした常識を教えてやらねばな…
…クツクツク。

「(ゾクッ!)(な、何だ…今の寒気は)」

ミラは俺が考えていることを勘でわかったのか汗をかいている。

例の部屋の前に着くとブツとジュードが何かを思ったのか俺たちに話しかけてきた。

「ねえ、ミラ、セリカ。これって奥を目指してる?出口に行かないの?」

出口に行かず、別の部屋の前にいるに俺たちを不思議に思ったのか

そういつてきた。

「ああ」

「そうだ」

「逃げないと危ないんじゃない？ここ普通じゃないし……」

「危険は承知しているが探さねばならない物があるのでな。君には悪いがつきあってもらう」

「悪く思ふなよジュード。これが終われば帰してやるからな」

「うん。一緒に行くって言ったのは僕だしね。ここから出られれば問題なし……」

そういうジュードに俺とミラは思わず、

「ふふ」

「クク……」

笑ってしまった。

「？ 何？」

「いや……。セリカが言ったように用を済ませば、必ず君を外まで送り届ける。安心するといい」

「俺達がしっかり送ってやるよ」

そう、俺達が言うと、少し笑顔でジュードは

「あ、ありがとう」

少し楽になったのか笑顔を取り戻すジュード。

カードキーを通し、部屋に入るとそこには…

「何これ……」

巨大な砲台の様な物があつた。

「やはりか…黒匣^{ジン}の兵器だ」

「まさか6年間、静かだと思っていればこんなものを作っていたのか…」

ミラと俺はその砲台を見てそう言い砲台に近づいていき、ジュードも近づき、コントロールパネルを操作し、情報を出している。

「クルスニクの槍……？創世記の賢者の名前だね」

ジュードが巨大な砲台…クルスニクの槍を言うと、ミラは四大召喚陣を展開し始める。俺はさすがにここで最大級の精霊術を使うと俺達にも被害があるのでミラに任せることにした。

「ふん。クルスニクを冠するとは。これが人の皮肉というものか…
…。やるぞ！人と精霊に害なすこの兵器を、破壊する！」

ミラがそう言うとミラの周りに四大精霊達が姿を現す。

四大達はクルスニクの槍へ突進し、周りに展開する。

「彼らが四大精霊……。ミラは本当に精霊マクスウエル……。!?」

ジュードはその光景に目を奪われていた…。しかし、クルスニクの槍の根元に誰かがいるのに気づき、目を向けた。俺もそれに釣られ、その方を見てみるとそこには…俺とミラでぶっ飛ばした少女がいた。

「君はさっきの!？」

「お前はさっきの!」

俺とジュードが声を聞いたミラが俺達の見ている方向に目を向ける。クルスニクの槍の根元近くにあるコントロールパネルの所に少女が立つ。

「許さない……。!うっざいんだよ……。!」

そういいながら、コントロールパネルを操作し始めた。

それに伴い、クルスニクの槍が起動し始め、四大達がクルスニクの槍を破壊するために溜めていたマナや俺達、少女のマナを吸い込み始めた。

「うっく……。!マナが……。抜け、る……。!」

「バカもの!正気か?お前も、ただではすまないぞ!」

「今すぐ、クルスニクの槍を止める！お前も危ないんだぞ！」

俺とミラがそういうも……

「アハ、アハハハ！苦しめ……し、死んじゃえー！！」

そういいながら倒れる少女。

「^{ゲート}靈力野に直接作用してるんだ……」

ジュードが今の状況を説明する。

「すこし、予定と、変わったが……いささかも問題は……ない！」

ミラはそういい、一歩一歩進み始め、クルスニクの槍の前にある「
ントロールパネルに近づく。

俺もミラと同じようにクルスニクの槍に近づいていく。だが、

「ミラ、セリカ、下！」

ジュードの声で自分の足元に魔術陣が展開された。

それと共に、クルスニクの槍のManaの吸収力が上がった。くっ、こ
れは結構きついぞ！

「お前たち、引きずりこまれるぞ！」

ミラを見ると、コントロールパネルから出ていた鍵のようなものを
コントロールパネルから取り出す。

しかし、クルスニクの槍はManaを吸収が止まることがない。くう、

一度、起動したら吸い込むのが終わるまで…止まらねえのか!?

何かクルスニクの槍が止まる方法を考えていると俺の頭の中に声が響く。

【レオン、ミラを頼みました】

【僕達が捕えられている間……ミラを頼んだでしょ】

【今はお前が一番、頼りになる。ミラを頼むぞ】

【頑張ってくれよな。僕たちの分まで】

「（お、お前ら……。わかった！お前達の方まで俺がミラを守る！）」

【そうです、か。安心しました】

ウンディーネの声や他の四大達の声が頭の中で響き、四大達は最後の力を振り絞って力を解放した。

それによって発生した風にジュードは飛ばされた。

「う、うわぁー！」

俺とミラは何とか踏ん張っている。が、この状態じゃそんなにもたないぞ！

「くっ、せめて、これだけ、でも！」

「持っていくぞ！」

俺とミラは同時に鍵を掴み、それをコントロールパネルから引っこ抜く。それと同時に、光を発した。

それに吹き飛ばされ、俺とミラは壊れかけている通路に寄りかかる。

ミラは鍵をディスク状にし、懐にしまい、いつものようにシルフの力で飛ばうとするミラだが…

「……………！」

術は不発に終わり、ミラは落ちていった。

「あ！？ミラ！」

俺は落ちていくミラを追うため、壊れた通路の鉄屑を足場として利用し、足にマナを溜め、一気に解放し、猛スピードで落ちていくミラに追い付き、抱きしめる。

「セリカ！？」

「黙っている！舌を噛むぞ！頭を俺の胸元にくっつけて頭を低くしている！」

俺はミラを衝撃から守るために強く抱きしめる。

「……………！」

隙間からミラの顔が真っ赤になっているのを俺は見逃さなかった。でも、何で？

そう思いながらも俺達は水面に叩きつけられたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3076ba/>

テイルズオブエクシリア～精霊王の意思を継ぐもの～

2012年1月12日00時47分発行